

おじさんの青春日記 くその2く

恩師

佐藤はじめ先生

《コピーライターへの道開く！

Y M C A コピーライター塾第一期生募集！ 四月開講！

宣伝広告理論からラジオ・テレビCM 台本、写真技術、コピー制作など

あらゆる広告制作技術を六ヶ月で。各界で活躍中の豪華教授陣。就職、

転職、自宅就業に有利。授業週二回午後六時三十分から午後九時まで。

受講料 円（分割可）。お問い合わせは八丁堀・広島Y M C A 担当者まで《

一九八六年（昭和六十一年）の春、新聞広告で見つけた小さな広告がきっかけで、私は夜間の「Y M C A コピーライター塾」に入塾しました。

宣伝マンにあこがれる大学生、転職を模索する会社員、主婦、OL。職業も年令も雑多な二十人ほどの生徒が同級生です。最年長の私は、いつの間にか「級長」に選ばれました。

コピーライターの仕事は、企業の製品やサービス、情報をもっとも効果的な手法で顧客に伝える、文章を創作することが主な仕事です。わずか数文字、数行の言葉で端的に訴求を表現するキャッチコピー。それに続く、やや長文のボディコピー。

雑誌や新聞の広告だけにとどまらず、コピーライターの仕事はテレビ、ラジオ広告の制作や、大がかりな宣伝広告の戦略立案、新製品開発にまで及びます。

当時の私は、父が遺してくれた小さな工場を、父が手がけた仕事とは全く異なった分野へ転換するという仕事に没頭していました。専門書を繰りながら設計した、スポーツカー専用の特殊なエンジン部品の製造がようやく軌道に乗り始めており、それらの製品の販売のためのカタログや、パンフレットの制作に迫られていました。

しかし、その製品といえば、『真空溶解したアルミニウム・バナジウム添加のチタン合金を熱間鍛造した』『三次元骨格構造をもつポリウレタンフォーム濾過材料』と

いった難解な技術用語の羅列。とても手を加えないまま、セールス図書のなかに使うことはできません。

私の工場で造る特殊な工業製品の特長を、誰にでも理解してもらえ、受注につながる平易な商業文に変換してくれるコピーライターが、どうしても必要だったのです。しかし、それだけでなくも宣伝広告の分野で、市場規模や質で中央に大きく立ち遅れている広島で、専門的な工業知識をあわせ持つコピーライターを見つけることは至難のわざです。東京の専門ライターに依頼すれば、目玉が飛び出るような報酬を要求されます。社員数名の会社に、とてもそのような余裕はありませんでした。

私が物を造り続ける限り、この課題は終生ついてまわることになります。

「よし、それなら自分がやっつたる！」

恐いものなしの三十七歳の春です。

当時、一世を風靡していた糸井重里のような高収入、コピーライターとして大成し、いつか東京へ出て、ひよつとしたら映画女優との恋も。

不純な幻想が入塾動機の裏にあったのかもしれない。

*

「広告とは」「マスメディアとは」「市場調査の理論」「マーケティング」「グラフィックデザイン」

最初からコピーの制作を指導してもらえるものとはかり思っていた私たちは、開講後一ヶ月余り続いた座学に少々うんざりしていました。

しかし私は、大学紛争に明け暮れた大学時代から十五年を経たのち、黒板やチョーク、生徒の私語がざわめく世界にタイムスリップしたような思いに浸っていました。

昼間の煩雑な仕事を束の間忘れて、まったく新しい分野の学問にふれる歓びを感じ始めていました。

初めて教室に入った日、机の手ざわりを手のひらで確かめました。

大手広告代理店の広島支社に勤務されていた佐藤はじめ先生は、バリバリの制作マンでした。四十代という年令はその世界では油の乗り切った世代で、夜とない昼とない広告制作の仕事の間を縫って、佐藤先生は遅刻することもなく、大きな体を悠然と教室に現しました。

佐藤先生は、広告の大きな賞を何度も受賞されたという噂でした。

いつものように、両手をズボンのポケットに入れて教室に入った先生は、黒板の前に立つと、皆を見渡して「エヘン」と咳をひと声。

次に、愛敬のある丸い小さな目を皆の前に突き出して、意地悪く、

「宿題、できたかな？」

教室がガラリとなごやかな雰囲気になります。

語尾ははつきりと、言葉の歯切れが良くて、いい、悪い、をはつきりと口に出す佐藤先生の講義は、ユーモアのなかに決然とした先生の美学を感じました。

「うーん、この言葉がとっても新鮮だねえ。うん、いい、いい」

「前に言ったでしょ。借り物の言葉ではダメなんだ。あなただけしか語れないメッセージを、汗を出して綴（つづ）らなきゃダメなんです」

「とにかく現場なんです。取材なんです。その商品はどんなものなのか、どんな人たちがどんな思いで作っているのか、とにかく足を使って調べること。それからです」

佐藤先生は、生徒が制作した課題を丹念に黒板に書き移したのち、講評と添削に入ります。

講義が始まって三十分も経つと、先生の独壇場です。

黒板の前を縦横無尽、時には黒板から三メートルも四メートルも離れて、袖まくりしたワイシャツからのぞく太い腕を前に組み、黒板をにらんで、

「ウーンッ。でもねえ。そうなのかなぁ。ウーン」

と、つぶやきながら唸り声をあげます。

「机に座って、空想でコピーを書こうなどという横着な仕事を、私はゼツタイに許しませんっ！ クライアント（依頼主）の会社で製品を一所懸命造っておられる人に申し訳ない、とつても失礼な行為でありますっ」

コピーばかりではありません。

そのコピーにふさわしい活字の書体は、色彩は、グラフィックデザインとの整合性は、果ては印刷される紙の種類にまで、熱っぽい佐藤先生の声が続きます。

佐藤先生は大組織のなかで働く一人のサラリーマンでもありませんでしたが、周りを窺（うかが）がって出世してやるうなどという野心を、まったく持ち合わせていない人のようでした。会社の流れにそって器用に気遣いするよりも、広告の現場で口泡飛ばし、死にもの狂いで制作に取り組むことを、生きがいにならされているように感じました。

塾生の私たちには、

「コピーライターだけで終わっちゃダメだよ。各所に目くばりの出来るディレクターになりなさい。そうして、出来たら、経営のことも解るプロデューサーを目指しなさい」

と、いつも教壇から語りかけておられました。佐藤先生ご自身は、ご自分の思いを曲げて異種の人たちとつきあったり、業績の評定に明け暮れる仕事は避けておられるように私には見えませんでした。

勤務先の会社の応接室でお会いする先生より、私には黒板の前の先生の方がずっと輝いて見えました。

宣伝広告という作業が決して浮わったものではなく、様々な分野の人の、実に真剣な議論と情熱のうえに成立していて、最終的にはたずさわる人の生き方、哲学によって成果が左右されるものだということ、私はこの頃になって痛感しました。カリキュラム初期の座学の意味がやっと理解できたのです。

造り出す製品の技術が優れてさえいけば世の評価につながり、顧客に受け入れてもらえるという工業の時代はとうに過ぎて、一人よがりや自惚れに陥りやすい、物造りの世界にいる私に、広告制作はとても刺激的な世界でした。

広告制作と機械工業。分野こそ違え、私の仕事の周辺と広告制作の現場は驚くほど共通しており、もの造りの最前線にも「市場、大衆」といったものへの見識や、広告制作の技術を導入する必要性を強く感じていました。

佐藤はじめ先生の口癖は、「だからどうした?!」でした。

「そのコピーのあとに、『だからどうした?!』という言葉をつけて考えてごらん。

」

「だからどうした?!」。たとえば、今をときめく糸井重里のコピ

ー「不思議、大好き。」です。

「不思議、大好き。」

「だからどうした?!」。

「だからどうした?!」と一度居直ってみて、その言葉を反芻（はんすう）した時に、なにか心にぐつと残るものがありますか？

そうなんだよね、今の時代、『不思議』なんて言葉、忘れていたよね、というような共感がありますか？

その言葉にふれることでパアツと世界が広がるというか、余韻というか、そんな問題提起というか、空間的なものごとっても大切なんです。ぼんやり生きていちゃ、ダメなんですっ!

私にとつてまるで難解な、高度な俳句の世界のようでした。

ビニール袋いっぱい缶ビールを教室に提げてこられて、

「きょうは授業は無しっ!（声をひそめて）飲み会にしましょう」

と言つて、塾生に拍手と歓声で迎えられることもありました。

佐藤先生の授業は、いつもこんな調子でした。

時によると夜中の十二時近くまで、コピー塾の明かりだけが明々としたままの時が、幾夜もありました。

塾生の誰もが、佐藤先生に叱られることを望んでいました。

*

YMCAコピーライター塾に通い出してまもなく、私は一冊の本を思い出していました。

『江分利満氏の優雅な生活』で直木賞を受賞した山口瞳さんの著書のなかに、著者の青春時代の自伝ともいえる『小説 吉野秀雄先生』という本があります。

昭和二十一年の春、敗戦後間もない鎌倉に「鎌倉アカデミア」という大学校が創設されました。

鉄火場に入入りし、ヤクザとつきあい、喧嘩に明け暮れていた当時十九歳の山口瞳は、この大学の文学部に入学します。大学といっても文部省の認可もない私塾のような学校のことでですから、資金も充分ではなく、鎌倉・光明寺の本堂や庫裏（くり）を仕切ったの授業が進められました。

国文学の片岡良一、仏文学の中村光夫、英文学の高見順、吉田健一という、今思えば現代日本を代表する錚々たる教授陣にまじって、教授、吉野秀雄先生は「万葉集と短歌」を講じていました。

明治三十五年、群馬県高崎の織物問屋に生まれた吉野秀雄は、病弱な少年時代を送ったのち、かろうじて慶応義塾大学経済学部に進みます。しかし、卒業を目前に結核という業病をえて、中途退学を余儀なくされます。生涯を病のなかに過ごした吉野秀雄でしたが、因習的、閉鎖的な戦前、戦中、戦後の歌壇にあつて、独学で極めた彼独自のきらめくような短歌の世界を創出しました。

「鎌倉アカデミア」で初めて吉野秀雄先生に接した山口瞳は、そのときの様子をこのように書いています。

「先生は、教室に入ってきて、何も言わずに、いきなり、黒板に、吉野秀雄と書いた。大きな字だった。白墨を叩きつけるような、勢いのいい書き方だった。

『これが私の名前です』
しばらくの間、自分の字を見ていて、こちらにむきなおつて、そう言った。自分の字の一字一画をたしかめているような感じだった。

私たちは、あつけにとられた。先生の声は、まさに庫裏の障子の震えるような大音声であった。大きな声であるばかりでなく、不思議な熱っぽさと力強さにあふれていた。ふりしほるような声だった。（中略）

そういう感じが、ただちに、私を撲（う）った。腹の底に何かが響いたようだ。おそろしかった。

教室に、失笑と私語がおこった。みんな、びつくりしていた。一言で、たちまち教室が緊張した。失笑はすぐに止み、静かになった。

先生は、今度は、黒板には会津八一、松岡静雄と書いた。

『これが、私の先生の名前です』
そう言つて、また黙つてしまった。突つたまままで、白墨の字をいとおしむように見ておられた。

誰かが、高い声で笑つた。つられるように何人かが笑つた。私は、どうなることかと思つた。次に何が起るか。おそろく、叱声が飛ぶか、笑つた生徒にむかつて先生が突進してゆか、教場を蹴るようになって出てゆかれるかするのだろうと思つた。

しかし、先生は、こちらを向いて、ニヤツと笑つた。なんともいえぬ、やさしい顔だった。（中略）

教室がなごやかになった。そうして、すぐに万葉集の講義にはいった。」

何ら飾らない、万葉の童（わらべ）のような吉野秀雄に、山口瞳は急速に傾倒していきま

す。吉野秀雄の家族とも、親戚のような誼（よしみ）を結びます。

十九歳の山口瞳にむかつて、
「山口君！恋をしない。恋愛をしない。恋愛をしなければ駄目ですよ。

と酔つて、けしかける吉野秀雄、四十四歳。」

酒を飲むとすぐに酔ってしまい、軟体動物のように酔ってしまっただけから、とめどなく飲む。酔って電信柱に抱きついたままの吉野秀雄を、山口青年は必死にひき剥がし、背負って家まで送り届けます。

「若くとも、貧しくとも、恋ぐらいすべし」。

吉野秀雄の口ぐせでした。

その年令の山口瞳にとつて、恋をするということは結婚と同義であり、学生の彼にそれは不可能なことでした。

マグワイとかワイカンという過激な言葉で山口青年をアジった吉野秀雄でしたが、他の言葉、たとえば、性交とかスケベエとかいう汚い言葉を口にすることは一切ありませんでした。卑しい考え、卑しい生き方を何より嫌悪する吉野秀雄でした。

まぐわいははかなきものといはれども

七日経ぬればわれこひにけり

吉野秀雄

性は生の讃歌であり、吉野秀雄をとりまく相次ぐ不幸と、死の影が吉野秀雄をして、なおさらに赤裸々な生命への希求に駆り立てたのかもしれない。

吉野秀雄の純潔な歌を読めば、そのことが瞭然と理解できます。

山口瞳と吉野秀雄との交流は途切れながらも、昭和四十二年七月に吉野秀雄が他界するまで続きました。山口瞳は晩年まで、吉野秀雄を生涯の恩師と仰ぎ続けました。

その日の食にもこと欠く敗戦直後の世のなかで、文芸を唯一のなりわいとする吉野秀雄の生活は赤貧、病苦の連続でした。加えて、後妻と先妻の娘との激しい相克、長男の結核、それにつづく発狂。

このような境遇のなかで、吉野秀雄は葉先に光る露のように清冽な歌を次々と発表しました。

僭越の極みながら、作品のなかから十七選。

前妻の病死の前後に。

病む妻の足頸にぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし

額冷やすタオルの端に汝がなみだふきやりてはわが涙拭く

潔きものに仕ふるごとく秋風の吹きそめし汝が床のべにをり

院内に居処もなく物干場のかげに煙草を吸ひつつし哭く

今生のつひのわかれを告げあひぬうつろに迫る時のしづもり

をさな児の兄は弟をはげまして臨終の母の脛さすりつつ

母死にて四日泣きぬしをさながら今朝登校す一人また一人

前妻との娘を詠んで。

長の娘を母によく似つと人のいふにつくづく見つめ汝ぞ恋しき

旅の夜を上上の娘と蚊帳かやに寝てあはれ亡き妻のこよひ恋しき

貧しい日常に。

身を賣めて詠みし十首の歌売れど味噌一貫目得むによしなく

一皿の乾パンに水の昼飯は机のうへにすぐに済みたり

明日子らに持たす弁当の糧かて絶えしこのさ夜更けのあおばづくのこゑ

いまの世に正しき者は貧しなどいひける頃は余裕ありにき

昭和二十二年十月。詩人、八木重吉の未亡人、とみ子を熱愛し、再婚。自宅でささやかな結婚式をあげる。吉野秀雄が束の間味わうことができた、幸せのときであった。

結婚式での誓詞にかえた歌のほか。

これの世に二人の妻と婚あひつれどふたりは我に一人なるのみ

恥多きあるがままなるわれの身に添はむとぞいふいとしまざれや

うつし世に大き悲しみを三たびまで凌ぎし人は常にやさしき

末の子が母よ母よと呼ぶきけばその亡き母の魂たまも浮ばむ

私が二十代の頃、吉野秀雄の歌を詠じるうちに、自然と憶えてしまった歌があります。昭和五十三年（一九七八年）、結婚の翌年、長男が生まれました。父の工場の再興に試行錯誤を繰り返していた私は、逆転をかけた新製品の発売も在庫の山、というありさまを何度か続けていました。年には不相応な借金を負って、預金はゼロ、昼食もままならない一時期を経験していました。

その頃出会った吉野秀雄の秀歌。

学校よりもどりきし子が何もせず

おしだまれるは夕餉ゆづけ待つなりなり

いうまでもなく、極貧の吉野家の子供たちが学校から帰宅しても、食べさせるものとしてなく、家の窮状を知りぬいている子供たちは「ひもじい」とも言わず、ただ、押し黙っている、というものです。

生後間もない長男を毎朝、保育園に預け、私は工場へ、妻は結婚前からの職場へと向かう日々を送っていた私に、吉野秀雄のこの歌は、何かを私に突き付けてくるものがあるように感じたものです。

二十八文字のこのコピーは、いつしか、私への勇氣に変わりました。

しばらく経つてのち、小学校に通う子供たちが、私のような者を親と慕って、毎日、元氣よく声をかけて学校から帰ってきてくれることを、ありがたいとも、不思議なこととも感じるようになりました。

肉のつながりのない父親にとって、子供とは神か仏からの預かり物のようなものなのかもしれない。

この思いをコピーにまとめて、宿題の作品として佐藤はじめ先生に提出したことがありません。

先生は、いつものように私の顔を覗きこむように首をかしげて、

「そうなんです、これなんです。この思いを大切にしてください」と、激賞してくださいました。

この時、人の父親でもある先生の頭のなかには、先生のご子息の姿がよぎったに違いありません。

*

私の恩師、佐藤はじめ先生は、コピー塾の講師を終えられたのち、しばらくして東京に転勤されました。授業料の滞納が多かった「YMCAコピーライター塾」は、私たち一期のみで打ち切りとなったという噂を聞きました。

コピーライターとして大成し、女優と恋におちいる夢はついに果たせませんでした。数え切れないほどの出会いのなかで、広告制作の世界の、茫々とした広さをのぞき見る事ができました。

「いつか一緒に仕事がしたいのう」

というコピー塾時代の二人の会話どおり、私と遅刻の回数を競いあっていた山本正義君は、今では私の会社の取締役として経営にあたってくれています。

平成六年暮れ。佐藤先生から戴く毎年の年賀状を楽しみにしていた私に、年賀欠礼の便りが届きました。

一人きりのお子さん、先生のご長男を自動車事故で亡くされたというものでした。思わず葉書の字面を追うことをやめたいようなお便りでした。

ただただお慰めするしかない。

書く文字の空しさに嫌気を感じながら認めたお悔やみの手紙へ、佐藤先生からの返書が届いたのは、年も明けて二月のことでした。

これほど哀しい、まさにご自分の血を絞って綴られたような長文の文章が、先生独特の大きな字の宛名が書かれた封筒に入っていました。

「失って困るもの」が無くなったことも加わり、ようやく「腹が据わった」気がします。『まっとうに生きることへの強さ』、『ダメな奴への優しさ』そんなあたりへの腹であります。一方である種の凄味さえ自分で感じるようにもなりました。

という添え書き。吟味された用紙いっぱい、佐藤先生、生涯一度の文章が整然と印刷されていました。

*

十一月十六日通夜、十七日告別式。

君を知る私の友人にも知らせず、会社の人達にも遠慮願ったにもかかわらず、私たちの想像をはるかにはるかに越えたたくさんの人達が君を送ってくれました。それ以降も連日多くの方々が遺影と遺骨の前で泣いてくださいました。私たちの友人、先輩からもたくさん心のこもったお手紙やお電話を頂戴した。

理解されにくい性格ゆえに友達が少ないと思っただけに、こんなにも多くの方が君に何かを感じていてくださっていたのかと思うと、嬉しかった。最後に君がくれた大きな親孝行、確かに受け取った。

事故車にあつた遺品を母さんと裏庭で焼いた。取り出してくれた0君の配慮で血が付いたものは無かつたとはいえ、ひしゃげた筆箱、無残にくださったCD、普段の君からは想像もつかないきれいに取られていた大学の講義ノート

それらは、君の全身に降りそそいだであろう車のガラスの破片にまみれていた。私はその破片で左手の人差し指を切った。血が流れた。その時、私たちには孫が持てないことに、初めて気がついた。それを告げると母さんは気分が悪くなり中座した。

君の無念さなのか遺品は燃えにくく夜になった。赤い炎が暖かくきれいだった。二人だけの野辺送りの後、母さんはあの日以来、初めて泥のように眠った。

これからというのに、と多くの方が慰めてくださつたが、私たちは、よくぞ二十歳まで生きた、頑張つた、よくやつた、と君を褒めてあげたい。

安易な妥協を嫌い、ものごとの本質にこだわり、奔放にみえてどこか禁欲的であり、過敏なほどに人に気遣い。その限界に達すると爆発し多くの人に迷惑をおかけした。

その都度、私たちは君を責めた、幼児性をなじつた、社会のなかに生きることの掟を説いた。しかし今回多くの人達から、私たちの知らなかつた君のもう一つの姿を知らされた。

「いつそ不良になれば楽に生きられる」とよく言っていたそうだね。フェデリコ・フェリーニ監督の映画が好きだった、最近感動した本は有島武郎の「小さき君へ」「生まれいづる悩み」だった、「この頃、やっぱり親父に似ていると思う」。車の中の遺品のノートにも「人生の岐路をエンジン全開でかつ安全に走り抜けるために」というフレーズがあつた。

「かつ安全に」。ようやく世間と折り合う術を身につけ始めていたことを知らされた。幾度の挫折にもめげずいつも前に前に進もうとしてきた君の生き方、褒めてあげたい。

母さんは、母親がゆえの本能なのか君の寿命が長く無いことをどこかで感じていたと言ふ。身近な人からさえ「甘やかし過ぎ」と言われても、すべてを君に捧げて生きてきた。

私はこの十年近く怒つてばかりいた気がする。自ら蹴落としはしなかつたが、谷から這い上がってくるのが成長と思ひ込んでいた節がある。半ば意識していたとはいえ、あまりにも常識的に対処し、父親として未熟だった悔いが日増しに強くなる。

生き急ぐかのように、君が執拗に追い求めていたものは何だったのか、という私の問いに母さんは「幸せ」と答えた。そう、それは大それたものではなく、ささやかなものであり、「安らぎ」だったに違いない。君が好きだった向田邦子さん、倉本聡さんの描く世界、そこでは人が人に優しく、誰もが人としてまっとうに生きることにかんばり、ごくごく当たり前のことなのに今の世では郷愁となってしまうた生き方。それを探していたのだということが今はよく理解できる。

あの日から我が家から「音」が消えてしまったことに、君がいなくなってしまうたことを実感している。もうすっかり冬になった。弱々しいけれどやさしい日ざしに懐かしさとありがたさを感じている。

日だまりの中でボンヤリ二人して君のことを思い出しているときが妙に心地良い。私たちは一遍に年老いた気がする。

しかし、私たちは、君から託されたことを忘れてはいない。助手席にいて君に連れ添うように逝った小学校時代からの唯一の親友岡田君、そして彼のご両親、妹さんへのあがないである。何をもってもあがなえない。永遠に見つからないであろうあがないのために、私たちは、懸命に強く生きたいと思う。

君が命名した愛犬「真吾」は、あの日から三日ほど一切食べ物を受けつけず塞ぎ込んでいたが、今は元気になった。心なしか「甘え犬」になった。君の替わりをしているつもりなのだろう。

最後に、君の新居は「横浜霊園」に決めた。以前、我が家から山づたいに、真吾も連れ三人で散歩にいったあの霊園だ。心ゆくまで眠れ。起きなければもう疲れ果てることもない。いつの日にか私たちも逝く。その日まで、ゆっくり眠り給え。

*

佐藤はじめ先生と奥様は、ちょうど横浜と接するあたり、神奈川県鎌倉市に二人きりで住まいです。

先生のご自宅から真南へわずか三キロのところに、歌人、吉野秀雄が戦後荒廃の世のまつただなかで、青年達に熱く万葉集を講じつつけた、鎌倉・光明寺があります。

死の直前、病床の吉野秀雄は生涯の大半を過ごした鎌倉に、この短歌を残しました。

彼の世より呼び立つるにやこの世にて

引き留むるにや熊蝉の声

吉野秀雄

この作品を、現代を懸命に駆けぬけた二人の青年、
鈴木大介君、岡田功一君のみ魂に――

参考文献

- 「あの広告はすごかった!」 中経出版
「小説・吉野秀雄先生」 文芸春秋
「やわらかな心」 講談社
「定本 吉野秀雄全歌集 第一巻 第二巻 第三巻」 弥生書房